

EU加盟後のポーランド

～ヨーロッパ化とアイデンティティ～

21世紀は「変革の世紀」です。今、大胆に自らを変えていく国・地域が世界中の注目を浴びています。日本との間に、今年、国交回復50周年を迎えるポーランドも、そうした国のひとつです。

1989年の体制転換を経て、2004年にEU加盟を果たしたポーランドは、移行期の試行錯誤と苦闘を経て、現在めざましい変貌を遂げて注目されています。2006年度の日系企業の投資額が過去15年間の累積額に匹敵するなど、わが国との関係も最近急速に深まっています。

日本では、まだまだ知られざる国のポーランド。ポーランドは、これまでどのような選択と変革を経験し、現在どのような状況にあり、そしてこれから何をめざして進もうとしているのでしょうか。ポーランドの過去・現在・未来と、ポーランド理解のキーポイントについて、この国を最もよく知る専門家たちが、具体的にわかりやすく、語り合います。

2007年11月4日(日)13:30～16:30

関西学院大学梅田キャンパス(K.G.ハブスクエア大阪) 1004教室

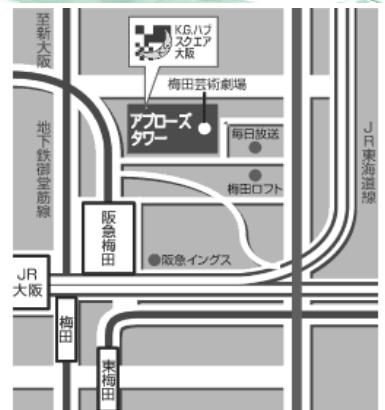
http://www.kwansei.ac.jp/kg_hub/index.html

アプローズタワー (ホテル阪急インターナショナル) 10階

大阪市北区茶屋町19-19

TEL 06-6485-5611

参加料: 500円(資料代) <申し込み不要>



<パネリスト>

藤井和夫(司会) 関西学院大学経済学部教授。日本ポーランド協会関西センター代表。「ポーランド、多様性に満ちたボーダーランド」 ポーランドの波瀾万丈の歴史は、そのボーダーランドとしての位置に由来する。その苦悶も栄光も、挫折も成功も、ボーダーランドとしての特質と、他に類を見ない社会の多様性から切り離すことができない。躍進するポーランドのアイデンティティを理解する鍵を探る。

小山 哲 京都大学文学部教授。「ラテン語文化圏の中のポーランドー過去と現在」 今日のポーランドではラテン語はほとんど用いられないが、中世から近世にかけてラテン語はポーランドの公用語だった。現在でも、歴史的な建造物には多くのラテン語碑文が見られる。言語として使われなくなっても、ラテン語文化圏に属しているという意識は、ポーランド人のヨーロッパ・アイデンティティの重要な核になっている。ラテン語がポーランド史で担った役割を紹介し、ヨーロッパにおけるポーランドの位置について考える。

田口 雅弘 岡山大学大学院社会文化科学研究科教授。「成長と摩擦のポーランド経済 21世紀の展望」 ポーランド経済はEU加盟移行も順調に成長を続け、ポーランド南西部はヨーロッパの新しい産業集積地となりつつある。しかしEU先進諸国との経済格差は大きく、EU補助金問題、労働力流出問題、ロシアとの対立など様々な問題を抱えている。ポーランドはEU経済を成長させる原動力になるのか、格差が固定してEUのお荷物になるのか。ポーランド経済の21世紀を展望する。

小森田秋夫 東京大学社会科学研究所教授(所長)。「カチンスキ政権をどう見るか」 2005年の選挙によって成立したカチンスキ政権は、その独特の現状認識と行動様式によって国内における評価を二分し、EU内でも波紋を上げた。1989年以降のポーランドにおける政治潮流を振り返り、このような政権が今日成立した意味を考えながら、10月21日の議会選挙の結果にも言及する。

主催/日本ポーランド協会関西センター

<http://www1.odn.ne.jp/~cbg37020>

共催/関西学院大学 産業研究所

後援/駐日ポーランド共和国大使館、在大阪ポーランド共和国名誉総領事館

連絡先/TEL・FAX:0797-61-0377

e-mail:tmfujii@pop21.odn.ne.jp (藤井)